

山に親しみ山を想う

生き物をいじめの思い出

<岡本>

「2、3歳程の男の子が街路樹の根方から出てきたダンゴムシ(団子虫)を見つけて踏んづけていた。若い母親は「虫が痛がって可哀想でしょう。死にかかっているわ、やめなさい」と叱っている。子供は命、死の概念を知らないで、ただ興味本位で踏んづけているのだ。踏みつける自分の動作やダンゴムシがもがくのを面白がっているに過ぎない。死の概念が解らない児に苛めをやめさせるには、躰として中止を強制するしかない。

生き物苛めをする子供が学校にあがれば、友達苛めをするようになるのではないかと母親は心配しているのだろうが、それは杞憂に過ぎないだろう。自分も子供の頃、虫や他の生き物苛めをやりたい放題してきたが、友達を苛めたことはなかった。生き物苛めが過ぎれば、殺すことになるということがわかれば、可哀想だと思えるようになるであろうし、そのうち苛めも飽きて面白くなくなってくるものだ。

小学生の頃、夏休みになると、日記と工作以外の課題をし終えて両親の実家で田舎暮らし(遊び)を満喫していた。父の実家の隣には鬱蒼とした鎮守の森があって、一本の大木にカブトムシ、カナブンなどの甲虫類や蝶類、蛾類が樹液を吸いに集まってきていた。早朝神社に行くと、幹は虫だらけで必ずカブトムシが2、3匹は捕れた。また、隣家からは、庭の端に積まれたおが屑の山から羽化して這い出してくるカブトムシを貰った。おが屑の中を探ると5cm程のでっぱりした幼虫が蠢いていた。カブトムシが余りに容易に手に入るので、苛めをする気も起こらず、金盥の中で喧嘩させて遊んだくらいである。昨今、お店で売っているカブトムシはおが屑で養殖したものだろうか。

生き物を苛めた小学生の頃は半世紀以上も前で、動物愛護管理法もなく、絶滅危惧種問題など議論されることもなかった。生き物が横溢していた頃だ。身近なトンボ(蜻蛉)とカエル(蛙)の苛めについて書く。

トンボを捕ってきて尻尾の節のところを少し切る。その穴に長さ10cm程の藁を挿す。トンボは尻尾をチョン切られても痛痒を感じないのか暴れないし、藁を挿しても無頓着な風である。そして放つ。尻尾が重たくなったので速くはないが、低空をふわふわと揺れるように飛翔していく。トンボが遠く見えなくなるまで、



チョットだけ可哀想だなと思いながら眺めている。藁がついているので動きは鈍く、餌の蚊など捕獲できないだろうし、尻尾の再生もあり得ないだろうから、何時間か生きながらえた末に、いずれあたら命を落とすであろうと思う。これまでトンボの鳴き声を聞いたことはないのだが、尻尾を切っても、藁を挿しても、体を振るわせもせず声を上げないのは何故か、臨終は草葉に止まって迎えるのか、それとも飛翔中に息絶えて墜落するのか等々、何

度も苛めをしているとこんなことを考えることもあった。

母の実家に裏山から清流を引き込んだ池があってカエルが生息していた。元気で大きなカエルを捕らえ、尻の小さな穴からこれまた藁を挿し込んでプーと息を吹き込む。カエルはトンボと違って暴れるので2人掛です。白い腹は、餅が膨らむように徐々に膨張する。立派な腹になったところでカエルを池に放つ。カエルは腕白小僧の手から逃れられたと思って、水に潜ろうとする。後ろ足を漕ぐが、腹が浮き袋になって潜れない。必死に潜水を試みるが徒労である。腹の空気は直ぐには漏れないようだ。カエルが潜れず水面で慌てふためく姿を見て面白がるのだ。カエルは潜れないと観念すると泳いで池の端に上がり、跳ねることもできずのそりのそりと鷹揚に草むらに消えていく。カエルの腹には若干の異変が起こるかもしれないが、放屁を繰り返す空気はやがて抜けて元に戻るであろう。このようなカエル苛めは度々したが、死が明白な生体解剖はしなかった。

天敵とも言える児童に苛められたトンボは横死し、カエルは運が良ければ天寿を全うするというのが両者の運命である。可哀想なことをしているとチョット思うことがあっても、慙愧の念をもつことはなかった。



昨今の大人はこんな苛めを知れば学校に通報し、その児童と父兄は注意されるのだろうか。だが、トンボやカエルなどの生き物を苛めては駄目だという一方で、肉を食べ美味を味わうためにトンボやカエルより賢い飼育牛や豚を屠殺しているのに、何故、誰もそれを駄目だとは言わないの？とその知恵深い児童が反論してくれば、大人は諄々と説明して納得させることができるのであろうか。

(了)